

## 清浄華院藏伝「泣き不動」像とその周辺

近 藤 謙

はじめに

清浄華院は京都市に存在する浄土宗大本山の一つである。中世より武家や宮廷貴顕との交流が深く、鎮西派と呼ばれる系統の浄土宗寺院の中にあつては稀有なことに室町幕府の庇護を受けて早くに隆盛し、一五世紀には最盛期を迎えた。ここには平安後期の優れた装飾経の紙背を料紙として永享九【一四三七】年に住持良秀によって記された『清浄花院之由記』と題された創建縁起が伝わり、最盛期の時点で所蔵されていた各種宝物の名称と由来を知ることが出来る。<sup>〔1〕</sup>ここに記載された宝物の多くが現在でも伝わっていることは、戦乱・火災等によって中世に遡る文化財の多くが失われてしまった浄土宗寺院にあつて貴重な資料と言えるだろう。

ここではその中でも一際異彩を放つ絵画作例・絹本着色不動明王像(伝「泣き不動」像)【図1】を事例として、清浄華院をめぐる中世の聖遺物信仰というべき世界について紹介してみたい。

## 【現状】

絹本着色 板貼り 厨子入り

本紙五一・〇センチ×二六・二センチ

表装八三・〇センチ×三六・四センチ

## 厨子

八六・七センチ×三八・五センチ 奥行き九・五センチ

内側に幔幕状の絹布が付属し、表側には観音開きの扉と扉金具が付属する。

このような厨子に収納される状態がいつごろに処置されたものであるのかは不明であるが、近世、江戸において出開帳が行われた際にはこのような形態となっていたことが判明し、おそらく近世初期には保存上の耐久性と荘厳性を増すため、現在の形に整えられていたと考えられる。厨子に納められた伝「泣不動」像は本来軸装されていたと考えられるが、現状では約二センチの厚みを持った漆箔の板に貼り付けられている。

現在、経年変化と湿損・熏染によって像容・本紙に相当の傷みが認められる。絵絹は中世の仏画にままみられる目の粗いものを用いているが、ところどころ断裂・欠失があり、彩色が剥落している箇所も広範囲にわたる。保存状態はきわめて憂慮すべき段階にあるといえよう。このような状態にありながら、かろうじて肉眼で全体像を把握しうる点は幸いというべきであろう。ちなみに伝「泣不動」像はじめ幾つかの宝物は、近世には通常、御所内に存在した同院の有力な庇護者・万里小路家の蔵に預けられており、開帳などの特別な機会にのみ、寺家へ返却される慣例となっていたらしい。

## 図像の特徴

全体の像容は肘を大きく張って右手に剣を構え、左手に絹索(絹の乱れのため、墨線は不分明)をとって岩座に立つ姿である。背面には右方向に幾筋もの炎をたなびかせる火炎光背をいただく。また岩座の下には波を表現しているらしい墨線がわずかに認められる。これが確かに墨線であれば波間に突き出した岩座に立っていることになる。

不動明王の頭部には、一見すると簡略な表現ながら、頂蓮と考えられるものが描かれている。また耳當・胸飾・腕釧・臂釧・足釧さらに渦を巻く毛筋、裳に表された文様などは金泥で描かれているようである。

剣をとる右腕の肘が大きく外側に張り出して構えられる様子、渦を巻く髪の毛の盛り上がりが高いことは、いわゆる円心様と呼ばれる系統の不動像に見られる特徴で、この伝「泣き不動」像もこの系統に属すると考えてよいだろう。また、鎌倉時代前期までの不動明王像の火炎光背の多くが、こまかな揺らめきを示しながらたなびいていることに対し、本作例は筆を長く引くことで揺らめきのない炎の単位を作り出し、これを平行に数多く重ねることでスピード感のある炎の立ち上りを表現することに成功している。また頭部の後方で炎が大きく円を描くように右方向へ膨らみ、さらに頭上で翼を重ねた鳥を思わせる炎の単位をもう一つ重ねることで、火炎全体に激しく立ち昇っていく生命感が付与されている。頭上の炎の単位【図3】は迦楼羅焰の一種と考えてよいであろう。

裳裾は大きく風をはらんで翻っている。条帛の折り返しや裳裾の翻るさまは筆を強く押し付けて輪郭線に肥瘦をつくり、体部を構成する単純な鉄線描の線との間に変化を生んでいる。

火災にゆらめきがほとんど見えず、右方向に大きく立ち上りながら剣先のような先端を激しく突き出す様子は、南北朝期の作とされる宅間栄賀作の東京・静嘉堂所蔵不動明王二童子像にも同様の表現を見ることが出来る。

両眼は輪郭が不分明ながら、左眼には墨線によつて縁取られた瞳【図2】が確認される。白眼部分の墨線が読み取りにくいのが、右眼を見開き、左眼は若干細めているようにも見える。彩色の剥落によつて墨線が辿りにくい点は惜しまれるが、近世にこれを模写したと考えられる二幅の作例に見られる表情よりも、やや顎の大きく張った、険しい表情であつたらしいことは読み取れる。

また、鼻先と喰いしばった口角の線も認められるが、細部が判別しづらい。おそらく口は口牙上出の表現となっていると考えられる。額には三条の水波相が見て取れる。

以上のような特徴を踏まえると、この伝「泣不動」像は不動十九観にのっとり諧謔性のない威厳を優先した姿、全体に暗い色調の背景、揺らめきのない大胆な火炎光背の形式、体部と衣部における筆法の使い分けなどから判断して、宅間派等の影響を受けた鎌倉時代後半以降の作品であると考えられよう。

最後に重要な点であるが、両眼の下に赤い顔料が滲んだように付着していることが確認される。おそらく描かれた当初からの措置と考えられるが、「涙」を流したという「泣き不動説話」にのつとつた涙（血涙？）の表現と考えられる。この点は後述するように「泣き不動説話」がはじめて確認される『発心集』『宝物集』など、鎌倉前期の説話に記された「涙のあとが見える」とされた内容を踏まえたものであろう。推定される製作年代から勘案すると、以下に述べる室町時代の宝物目録記載の品が伝存しているものと考えられる。

## 清浄華院における初出とその時代

泣不動像は本来、『発心集』『宝物集』などに収録された説話に仮託されて鎌倉前期以来、世に広く知られていた宝物であると考えられる。実際には説話に登場するとされる仏画・泣不動像は三井寺【園城寺、以下これを用いる】の常住院に伝えられていたようであるが、中前正志氏が指摘された『雑談鈔』の記事では鎌倉末期の元亨頃に所在が不明確となり、伊東ひろ美氏の紹介された元禄二【一二七〇】年の『淡海地志』では秘蔵されていたために失われた、として消息が途切れるようである<sup>6)</sup>。

現在清浄華院に所蔵される史料において、この伝「泣不動」像の伝来に言及する最古の記録は先に触れた永享九【一四三七】年の『清浄花院之由記』である。清浄華院でその存在が確認されるようになるのが園城寺での消息が途切れた後になることは興味深い。もともと清浄華院に伝えられる伝「泣不動」像は先ほど記したように鎌倉末から室町初期頃に降る製作と考えられ、鎌倉前期の段階で園城寺常住院に存在していたとされる絵画作品と元より同一ではありえないと考えられる。現在清浄華院に伝えられる絵画作品と、園城寺に存在していた絵画作品の間には幾重もの空白が存在しているのである。また本来園城寺の宝物と伝承されているものがなぜ、清浄華院に所蔵されるようになったのかについて『清浄華院之由記』はまったく触れるところがない。清浄華院と園城寺との接点としては向阿証賢がもと所属した寺院であったという点のみが史料上で知られる唯一の記録となる。このため、清浄華院では後世、向阿証賢が伝「泣不動」像を園城寺よりもたらしたとする言説が語られるようになるが、その内容を検討する以前に、まず『清浄花院之由記』における伝「泣不動」像の位置づけを確認しておこう。

この書は冒頭に同院が仁安元【一一六六】年、法然を開基として後白河院によって建立された縁起が記され、続いて宝物が列挙される。その内容は法然由来の品に始まり、円仁・源信・聖徳太子そして善導等にまつわる計二十四種の靈宝が記載され、簡潔にその由来が記されている。参考までに次にその内訳を簡略に記そう。

【清浄花院之由記】に記載される宝物の性格

直接法然に由来するとされるもの…一二

間接的に法然由来とされるもの…五

※間接的な品には法然以外の人物に関する由緒が付随している。

この内、冒頭の三つの靈宝は、天台の戒(円頓戒)を法然が伝授されていることから授けられたとされる。清浄華院でもっとも貴重視された靈宝。舍利・水瓶・袈裟で構成される。本来は最澄が入唐中、師の道遂より授けられたと記される。

平安後期の裝飾経浄土三部経は法然の師・叡空所持の品とされる。法然より後白河へ献上され、後に清浄華院へ渡ったと記される。

浄土五祖像。重源が宋から帰朝して法然へ進上したものとされ、筆者は五祖のひとり少康と記される。

円仁由来とされるもの…

一

源信由来とされるもの…

二

聖徳太子由来とされるもの…

一

善導由来とされるもの：

その他：

一 一

以上である。ここで「その他」としている一種が伝「泣不動」像を示しており、「三井寺泣不動智證大師御筆在当院」として記載されている。この目録の編者は当時の住持・良秀である。

詳細は後段に譲るが、室町期に將軍の庇護を受け鎮西派の浄土宗において法然の正統を継ぐ寺院として公認を受けた清浄華院は、この目録が編纂されたところに寺運の絶頂期を迎えた。『清浄花院之由記』においては良秀の師・等熙が勅によって七条袈裟を授けられたことを根拠として、清浄華院が「浄土一宗之本寺」と定められたとまで主張している。等熙は鎮西派とよばれる浄土系諸派の僧として、永享元【一四二九】年始めて「香衣」の着用を認可され、さらに死後に浄土宗の僧として初めて国師号を授与されるなど、最盛期の清浄華院の栄華を一身に体現したかのような人物である。この「香衣」着用許可の申請にあたっては万里小路家や等熙と親密な関係にあった当時の室町殿・足利義教の格別な推挙が存在したが、その際に根拠とされた事象は、この「清浄華院」が鎮西派浄土寺院の正嫡であるとされることに加え、浄土系諸派の中にあつて天台円頓戒を正統に相承しているとされたことであつた。また当時、鎮西派と競合する法然系教団であつた西山派の寺院・盧山寺は、明空志玉が足利義満の命によって遣明使を努めた功績によっていち早く「香衣」を許可されていた。清浄華院は西山派と鎮西派は同格であると主張しており、この事実も根拠として主張されている。等熙の「香衣」着用許可が承認されるにいたる過程は万里小路時房の『建内記』に詳述されている<sup>⑩</sup>。この中で承認が下りたことを喜びつつ、記者・時房は次のように記している。彼は幼くして父を亡くし、叔父によって養育されたことに深い恩義を感じていた。このたびの「香衣」着用に関する一連の運動は、その叔父に対する報恩であつたというのである。この叔父とは等熙

の先代・定玄であった。

幕府と朝廷によって公認された形となった上記の主張は、『清浄花院之由記』においても創建縁起と靈宝の由来として表裏を合わせるように記載されている。すなわち良秀が『清浄花院之由記』において述べた清浄華院の沿革と靈宝の由来とは、まさしく一五世紀、最盛期の只中にあつた同院にとつて体系的な公式見解とされるべき内容が反映されていると考えることが出来る。彼が記した「浄土一宗之本寺」としての清浄華院とは、『建内記』に記された「浄華院者鎮西一流之正脉也」という言葉を異なつた表現で言い換えたものと言えよう。良秀は『清浄花院之由記』に「右靈宝之記録如前代写之事」と記し、先行する縁起が存在したことを示唆しているが、彼はこれ以降幾つかの宝物縁起を記しており、最盛期の清浄華院にふさわしい創建縁起の創出・流布につとめた人物であつたと考えられる。その意図は先に記したように法然開基寺院としての清浄華院という言葉で定着させていくことにあつたと考えられる。『清浄花院之由記』は良秀の自筆本が伝えられるが、これ自体先に述べたように、同書に記載される法然の師・叡空書写の浄土三部經と伝えられる平安時代後期の裝飾經(阿弥陀經)の紙背を料紙として用いているのである。ここにも「法然創建の寺院」としての清浄華院という「あるべき事実」を広く定着させようとした良秀の意図が読み取れよう。しかし実際の清浄華院は、既に先学によって指摘されているように鎌倉時代末期、もと園城寺僧であつた向阿証賢によって創建されたものであり、良秀によって主張されているような法然創建寺院ではなかつた。<sup>12)</sup>むしろ法然と直接の關係を持たなかつた新興の清浄華院が他の浄土系有力寺院に先んじて「浄土一宗之本寺」と呼ばれるまでの權威を獲得したことが、良秀らをして頑ななまでに法然との縁を主張させる結果を生んだとも考えらう。<sup>13)</sup>「法然の聖遺物」とでも呼ぶべき遺愛の品を列挙した縁起の作成という事実から、等熙の達成した繁栄を受け継いだ人々は、鎮西派を代表する權威にふさわしい歴史を求めら



れ、その一つの回答として新たな歴史を創出することを選んだことが読み取れる。

このような性格を有する『清浄花院之由記』において、由来が法然や浄土教の祖師とまったく無縁である伝「泣不動」像が記載されていることは一見して不思議な印象を覚える。『清浄花院之由記』は同院が鎮西派浄土宗の正嫡寺院であるとする主張を権威づけるために編纂されたと考えられ、そこに列挙される宝物はことごとく法然や彼に先行する浄土教の祖師ゆかりの品で占められている。しかし本稿で紹介している「三井寺泣不動智證大師御筆」は全くこれらと性格を違えており、ここにこの作品の重要な意味付けが潜んでいると考えられる<sup>14</sup>。

良秀の編纂した目録の中で、「三井寺泣不動」のみがまったく法然および広義の浄土教と無縁でありながら記載されている事実は、良秀によってこれが少なくとも一五世紀の清浄華院にとって非常に重きをなす宝物と意義付けられていたことを推測させる。その価値とはどのように認識されていたのであろうか。それはおそらく中世寺院にとって時に教学とは距離を置いた部分で重要な信仰の拠り所とされ、また権威として重要視された「靈験」を表す宝物としての価値であったかもしれない。実はそこに、清浄華院と園城寺の唯一の接点というべき向阿が浮上してくることとなるのである。この問題を検討する前提として、以下で向阿証賢の生涯について少し述べておこう。

## 向阿証賢と清浄華院

向阿証賢は生年が不詳であるが、建武三【一三三六】年に示寂したことが知られる。『三井統燈記』『真如堂縁起』などに簡単な経歴が記されているが、それによると彼はもと園城寺の僧で、何らかの契機によってここを去

り、やがて鎮西派浄土宗に帰依した人物である。この人物に関しては、現在清浄華院第五世と位置づけられているが、これは法然から向阿に到る法脈相承上の歴世といふべきである。既に中井真孝氏をはじめとする先学の指摘が示すように<sup>15)</sup>、彼は実際の清浄華院の開山であった。この事実は先の『三井統燈記』『真如堂縁起』などに記されるほか、本稿でも度々取り上げている『建内記』など、中世の清浄華院関連史料が一貫して主張するところである。この立場をとらない中世史料としては『清浄花院之由記』をはじめとする一連の良秀の著作が存在するが、これらはむしろ異色というべき位置づけとなっている。等熙の寿像に書き込まれた賛において彼は「浄華第六世」と記されているが、これが向阿証賢を一世と数えた場合の歴世であることは中井氏によって指摘されることである。この事実は、少なくとも等熙の住持時代までは、清浄華院内でも向阿証賢が開山として認識されていたことを示唆するものであろう。

向阿証賢の生涯は明らかでない部分が多いが、宇高良哲氏によって紹介され中井氏によって詳細に検討された<sup>16)</sup>清浄華院所蔵中世文書の写本「古文書一六卷」などによってその生涯はわずかに明らかとなりつつある。乾元三【二二〇三】年、向阿は専空より三条坊門高倉に存在した「専修院」の土地と建築など一式を譲渡された。さらに三十年後の元弘三【二二三三】年、龜山院の末子で式部卿であった恒明親王より、令旨によってここに隣接する「北頼地」を寄進される。この文書は「浄華院」という寺号が確認される現状最古の史料でもある。また宛名は「向阿上人御房」とされており、追伸部分には恒明が深く向阿に帰依していることが強調されている。この「北頼地」は後醍醐天皇の命によって恒明親王が所有していた三条万里小路の土地と交換されたものであり、これを命じる綸旨は親王宛てに発給されていた。恒明親王はこの後も安楽寿院領越前国西谷庄（現在の福井県武生市）を清浄華院の末寺・称佛名院に寄進している。この土地は恒明の死後、継嗣となった全仁親王によって再安堵され

ている<sup>17)</sup>。実は『龜山院御凶事』によると、龜山院は始め西谷庄を孫の尊治(後醍醐)に相続させ、それ以外の越前国安楽寿院領を末子恒明に伝領させるよう遺言<sup>18)</sup>していた。その後なんらかの経緯によって西谷庄は恒明の所有に帰したようである。恒明は父・龜山院の愛を一身に受け、その遺言によって時の天皇であった兄・後宇多院の跡を継ぐものと定められていた。にもかかわらず龜山がなくなると後宇多は父との約束を反故にし、息子後二条と後醍醐を即位させることとなる。このような経緯が伏流水のように影響していたのか、恒明と後醍醐との関係は良好で建武政権では側近を務めたが、後に南朝が成立すると吉野には赴かず、京に残留している。

このような経歴を持つ恒明親王が向阿証賢と創建もない清浄華院の庇護者だったことは、後に宮廷貴顕との交流が生じる契機となった可能性が考えられる。万里小路家との関係も恒明を通じて生じたものであったのかも知れない。向阿証賢は恒明以外にも龜山院の子息と縁があったらしく、『真如堂縁起』では園城寺を出た彼が浄土僧へと姿を変えた地・花開院は「五辻宮皇居」と注が施されている。この「五辻宮」が龜山の子息・守良親王であることが中井氏によって指摘されている。龜山院周辺の人々と向阿証賢の間にどのような人間関係が展開していたのか、細部のディテールは不明であるが、清浄華院の創建は現在同院の縁起に登場する清和天皇・村上天皇や後白河院といった平安期の人物ではなく、大覚寺統の有力な皇族であった恒明親王の存在が大きな影を落としているのである。

向阿証賢はまた、自らの思想を記した『三部仮名抄』と称される一連の著作や、法然以来の法脈を証して弟子に与えた授手印など、鎌倉末期の浄土系僧侶としては例外的に多くの自筆文書が残されていることでも著名である。晩年は清浄華院を出、西京において建武三【一三三六】年に没したようである。

以上が向阿証賢の簡潔な生涯であるが、残念ながら現存する自筆文書の中に自らと園城寺の特別な縁を物語る

ような記述は見えない。また泣不動に關しても何ら触れるところは見えていない。しかし良秀はこの開山に關して、他に見られない興味深い逸話を伝えている。

### 伝泣不動像の傳來と良秀の意圖

この問題に關してはやはり良秀によって記された長祿三【一四五九】年の奥書を有する『淨花院靈宝之緣起』に興味深い記述が見える。そこでは泣き不動説話の構造をほぼそのまま使用しながら、病の床に就いた師僧を向阿とし、身代わりとなつて病を引き受ける弟子をその稚児としている。また説話の重大な改変としては、不動明王は向阿の守り仏とされており、師の病を弟子に移す役割で登場することである。不動が泣く場面もみられない。しかも結末として稚児は師の身代わりとして命を落としてしまふ。本来、弟子の自己犠牲に感動した不動の靈驗によつて師弟共に救済されるという奇跡が身代わり説話の要点であつたのだが、ここでは不動明王は説話の中核においてまったく役割を果たさず、ただ向阿の守り仏であつたというだけの位置づけである。すなわち説話構造としてはこの縁起は「身代わり不動」と呼べない存在なのである。

しかし『淨花院靈宝之緣起』が意圖した説話の要点は、本来「身代わり不動」の靈驗を説くことではなかつたようである。この説話の結末では、守り仏である「智證大師の御作」不動を向阿が拝んだところ、身代わりに命を落とした稚児の遺書を発見し、師に代わつて我が命を差し出した稚児の真意を悟つて無常を感じ、専修念仏門に帰依したことが説かれている。すなわち良秀がこの説話で意圖した内容は、本来は寺門の天台僧であつた開山・向阿証賢がいかにして淨土門に入つたのか、明確には伝えられないその信仰轉換の契機を説明する道具立てとし

て「泣不動」を位置づけようとしたことであつたようである。そこで説話の中心となるのは不動明王の偉大な靈験ではなく、向阿を念仏へと向かわせた稚児の自己犠牲であり、そのきっかけとしてのみ「泣不動」を用いているのである。すなわち、ここでは「泣不動」をいかにして浄土宗寺院にふさわしい靈宝として矛盾なく取り込むかという部分に力点が置かれているといつてよいであらう。

## 結 び

中世の寺社がさまざまな靈験縁起に彩られることで熱狂的な信仰を獲得していったことは既に多くの研究が存在している。しかし法然系の念仏教団は比較的このような説話に関係が薄く、それらは大半が宗祖・法然の神格化というべき方向で叙述された一連の法然縁起において、彼の事跡の一環として位置づけられていった。そのような法然の系譜を引く念仏教団にあつて、清浄華院に伝えられる「三井寺泣不動」は、舞台を平安時代の園城寺としている点、さらに同寺周辺で形成されていったと考えられる「泣不動」説話を主眼としている点で、念仏教団以外の人々にも受容される素地を有した宝物であつたと考えられる。すなわち、ここには念仏教団の説く死後の救済ではなく、それらの視点から欠落している病からの回復・死の回避というべき現世利益の要素が顕著に説かれていたのである。本来この靈宝が伝来していたとされる園城寺において、元享年間にその所在が不明となつたとされていたことも、「泣不動」説話が清浄華院へ移されるにあたつて有利に働いたことであらう。

実際の伝来経緯が信頼しうる史料上に見出すことが出来ない伝「泣不動」像であるが、良秀はいかなる理由でか清浄華院に存在することとなつていた、この著名な説話上の聖遺物を、「浄土一宗之本寺」となつた清浄華院

にふさわしい靈驗を物語る品として取り込もうとし、説話の再解釈を試みたようである。それは宗派内で尊重される閑ざされた教義とは別の次元で、多くの人々にその寺院の尊さを印象づけることのできる重要な存在であった。最盛期を迎えていた清浄華院にあつて、様々な説話で著名な「身代わり不動」を、本来の園城寺ではなく自らの靈驗として価値付けることには大きな意義があつたことであろう。しかし本来の説話内容ではこの靈宝はあくまで園城寺の宝物でしかない。このため良秀は本来の開山・向阿証賢を主人公として、浄土宗の教義にふさわしい新たな「泣き不動説話」の構築を試みたと考えられる。しかし残念ながら良秀の熱意にもかかわらず、その試みは実を結ばなかつたようである。中世の史料に清浄華院の伝「泣動」に関する記述はほとんどあらわれない。向阿を主人公とした「泣き不動説話」は、その後の清浄華院ですらほとんど語り継がれない結果となり、長く忘れられた存在となつていく。現在、わずかに京都・大行寺に伝えられていた『浄花院靈宝之縁起』の近世の写本が佛教大学付属図書館の所蔵とされているが、近世において清浄華院で語られていた「泣き不動説話」は、『発心集』『宝物集』以来の伝統的な園城寺を舞台としたものとなつていた。伝「泣不動」像は中世以上に人々の注目を集めるようになり、元文二〔一七三八〕年の江戸出開帳では当時の本尊であつた法然の肖像彫刻と同格の權威を獲得するに到っている。また万里小路家の人々はしきりにこの絵像を夢に見、模写を作成させるに到っている。やがてこの絵像の存在が、現在清浄華院所蔵となつている著名な絵巻「泣不動縁起」を寄進される契機となつていくのである。清浄華院を代表する靈宝としての伝「泣不動」像の權威は、明治の内務省による宝物調査においても監査対象とされるまで続いていくこととなる。

しかし結果として、著名な靈驗説話の浄土宗的再解釈を試みた良秀の意図は、弟子と不動明王による二重の身代わり説話という、原説話自体の有していた強い現世利益の靈驗を超克することはできず、広く受容されること

なく一時的な試みとして役割を終えたと考えられる。

補注

(1)

良秀はおそらく清浄華院住持を退いた後、さらに靈宝に関する縁起の述作を行っている。これらの著作はいずれも近世の写本であるが一つは参議藤原頼業が正保三【一六四六】年に編纂した『浄華院由緒記』に収録されているもので、『本寺浄華院靈寶之目録』と題されるものである。長禄三【一四五九】年正月一日の奥付が見え、良秀の肩書きは「比丘」となっている。基本的に永享九【一四三七】年の目録と一致する内容であるが、「戒法相伝血脈」など、等薫の香衣着用許可の際、清浄華院が喧伝すべき權威として表面化したことで新たに加えられたらしいものもある。ここでは法然を指して「高祖上人」「開山上人」などと記し、永享の目録より明確に開山であることを主張している。ちなみにこの書を編纂した頼業は、天文三【一五三四】年に秀馨によって書写されたものを底本としている。ここでは泣不動は「智證大師御作之不動」として記載されている。これに続いて、やはり近世の写本であるが佛教大学図書館所蔵の『浄花院靈寶縁起』と外題のある縁起が存在する。これは先の目録と酷似した内容であり、奥付は「長禄三【一四五九】年 正月二五日 比丘良秀」となっている。先の目録の十日後に記されたことになるこの縁起は、現在の内題では「浄華院靈寶之縁起」となっており、内容的にも先の目録より個々の靈宝に関する縁起が付与された形となっている。良秀が長禄三【一四五九】年正月に相次いで記したこの二つの縁起・目録は互いに仮名本と真名本の関係にあり、内容的にはほぼ一致する。ただし頼業の写本には略された文章など細部に異同もあり、これが秀馨が書写した段階でなされていったのか、『浄華院由緒記』編纂の段階での処置なのかは不明である。

(2)

清浄華院所蔵の『元文二年江戸開帳日鑑』に、宝物が江戸へ到着してから開帳の会場である回向院へと向かった際の行列次第が図絵されており、その中では現在清浄華院の本尊となっている木造法然上人坐像とともに、天蓋付きの輿に安置された泣不動の厨子が描かれている。おそらくこの厨子が現存する厨子であろう。江戸に運ばれた同院の宝物の中でこのような待遇を受けたものは本尊と泣不動しか知られておらず、かつては本尊に匹敵する存在として信仰を

集めていたことが窺える。

- (3) いずれも万里小路家の人々によって模写製作されたもので、「夢想泣不動」と題されるものは、俱利伽羅電王が描き足され、不動明王のとりる劔が尾に巻き取られるなど、図像に改変が加えられている点が特徴である。いま一幅は構図的にほぼ原本の模写であるが、表情やことに肩、彩色など細部に相当の異同が認められる。おそらくこれらの模写が製作された段階で、現状に近い保存状況となっており、細部は判明しづらい状態であったため、想定による改変が行われたのであろう。このため、これらの模写は伝「泣不動」像のおよその全体像を把握する上では有効な資料であるが、復元的な資料として用いるには限界のあることを留意すべきであらう。

- (4) 『宝物集』巻四(定本 新日本古典文学大系)では「絵像の仏眼より血の涙を流し」・『発心集』巻六(定本 新日本古典文学大系)では「眼より紅の涙をながして」とあり、いずれも末尾に今でもその跡が見えたと、奇跡の証拠が遺されていることを強調する内容となっている。

- (5) 『発心集』所収当該説話末尾に登場する記述を踏まえていると考えられる。中前正志「不動の涙―泣不動説話微考」(『国語国文』六五(四) 一九九六)

- (6) 前掲(5)「不動の涙」

- (7) 史料の詳細に関しては前掲(1)参照。この段階では良秀は奥書に「第十一世」と記しており、清浄華院の住持であったことが判明する。

- (8) 水瓶は那智経塚から出土した平安後期の作例と形状・構造が酷似しており、同時期の作例と考えられる。製作された工房が同系統である才能性も排除できない。一度火中したことがあるらしく、現在頸部は溶解して近世に補われている。また胴部にも各所に損傷が見え、錆掛による修理が施されている。この損傷がいつの時期かは不明であるが、清浄華院は応仁の乱や天明の大火など、洛中を襲った戦乱・火災によって幾度も焼失しており、そのいずれかの際に蒙ったものであろう。

- (9) 大半は現行流布している『建内記』に収録されている。また清浄華院には流布本『建内記』から脱落している箇所の記事が「『建内記』抜書」として軸装されて伝えられている。これは近世の写本と考えられるが、等焔が香衣着用を許



可される経緯に触れた一部分である。清浄華院にとって非常な權威の源泉となるものであったため、特に書写されていたものが遺されたものであろう。これらによると、正長元【一四二八】年頃より清浄華院では等熙の香衣着用許可について申請を行う方向で協議が行われており、同年將軍に就任した足利義教の推挙を経て運動を本格化させたようである。義教は青蓮院門跡であったことより等熙や清浄華院と交流があり、有力な外護者というべき位置づけにあった。室町幕府と清浄華院との交流は、当初、御所と室町第に近いという地理的特性から、足利義満が法要の際に宿所とする、といった関係から始まっている。足利義持はこのような関係を受けてか、有力な末寺であった越前西福寺を祈願所とした（西福寺文書）。また義教の子・義政も父のあとを受けて清浄華院を庇護している。さて義教は香衣着用の件について清浄華院や万里小路時房より相談を受け、三宝院満濟を通じて朝廷に推挙している。このことがあって正長二【一四二九】年、香衣着用は無事許可された。これは当時西山寺院であった廬山寺の明空志玉が遣明使の任を果たした功績として香衣を許可されたことに対し、鎮西寺院の正統である清浄華院も同格であるから、という発想から始められたものであつたらしい。時房によると、清浄華院のこの主張は幕府と朝廷によって承認されたようである。また近世の清浄華院では歴代住持の晋山式において、役僧が新任住持に等熙所要と伝えられる袈裟をまとうせる儀礼を行っていたことが知られる。この袈裟はおそらく明製と考えられる羅の精巧な作例であるが、清浄華院に伝えられる等熙の寿像がまとうている法衣とは形式が異なっている。

(10) 史料の詳細に関しては前掲(9)参照。流布本『建内記』によると、室町殿(義教)は將軍に就任した正長元【一四二八】年にも早速訪問しており、以後も幾度か法要に出席している。また嘉吉の乱で義教が殺害された後、正室三条氏が清浄華院で追善の如法念仏を行った事実も記録されている。室町將軍の菩提寺である等持院以外で、かつこの時期に浄土寺院での追善は稀有な例に属し、義教と等熙・清浄華院の個人的交友が窺われる。またここで時房が香衣着用許可の根拠としてあげたものは次の三点である。

「浄華院者鎮西一流之正脉也」

「戒法黒谷一流正統也」

「是又參帝師之故歟、等熙上人称光院御知識也」

これに加え、本文中でも触れているように当時西山派寺院であった廬山寺住持が遣明使となったことで香衣を許可された例を上げ、清浄華院も同格であることを記している。

- (11) 詳細は前掲(1)参照。『浄花院靈寶縁起』と、『浄華院由緒記』に引用される「本寺浄華院靈寶之目錄」であり、いずれも長祿三(一四五九)年の編纂である。

- (12) 清浄華院の創建に関しては、現在の寺伝では平安時代に清和天皇を本願とし、延暦寺の円仁によって開かれ、これ以後、後白河法皇より法然に譲られたとされている。しかしこのような縁起は既に中井真孝氏によって近世以前に遡るものではないことが指摘されている。また本稿でも見てきたように最古の縁起である永享の目録ですら後白河の創建とされており、清和や円仁は登場しない。実際の開山に関しては後段の本文でも触れているように同院に所蔵される「古文書十六卷」と題される中世文書の写本等により、鎌倉末期の向阿証賢であることが論証されている。

- (13) 鎮西流の中でも競合する有力寺院として法然の廟所や弟子の開基となる知恩院や知恩寺が存在しており、これらの寺院に比較すると清浄華院は法然と直接の縁の薄い新興勢力であった。にも関わらず他の寺院から抜きん出た権威を獲得してしまったため、それにふさわしい権威が求められる環境が醸成されていたと考えられる。

- (14) 泣不動縁起の研究はさほど多くはなく、以下のようなものが見える。築瀬一雄『泣不動』の説話(『中世日本文学序説』所収 荻原星文館 一九四三) 白畑よし『泣不動縁起絵巻』(『國華』九六七 一九七四) 『類焼阿弥陀縁起・不動利益縁起』(続々日本絵巻大成)(中央公論社 一九九五) 『新修日本絵巻物全集30』(角川書店 一九八〇) 志村有弘『雑談鈔』の組織と説話伝承観慶(『中世説話文学研究序説』桜楓社 一九七四) 『仏教説話の成立と伝承』(『説話文学の構想と伝承』所収 明治書院 一九八二) 南里みち子『泣不動の成立と展開』(『今井源衛教授退官記念 文学論叢』所収 九州大学文学部国語学国文学研究室 一九八二) 播磨光寿『三國伝記—いわゆる「泣不動説話」を中心に—』(『国文学解釈と鑑賞』五六(三) 一九九二) 竹居明男『僧証空 勝算年譜—不動利益縁起(泣不動縁起)備考』(『文化史学』五一 一九九五)

ちなみに現在清浄華院の文化財として著名な絵巻「泣不動縁起」は、重要文化財指定を受けている室町時代の作品と江戸初期に後水尾院の命で狩野永納が模写した作品の二本が伝えられている。これらには江戸の模本製作に際して記

された文書「梅小路殿書状」が付属しており、それによると重文本は当時、狩野永納の所蔵で会ったらしい。永納は院のもとに應じてこれを披露したところ、後水尾が非常に高く評価して模写を命じたようである。模写はこのとき後水尾に献上された。その後、子の靈元院に伝えられ、いつのころか彼から清浄華院へと寄進されている。その動機は本稿で取り上げている伝「泣不動」像を靈元院が拝見したことにあつたらしい。また、重文本は狩野永納へ返却されたが、彼の死後いつのころか入江孝治が入手するところとなり、彼より清浄華院へ寄進されている。その寄進理由は「貴寺に縁ある故」とされている。すなわち二本の「泣不動縁起」はいずれも近世になって清浄華院へ入ったものであり、重文本も永納の手元に存在していた以前の所在は不明である。これらの文書はいずれも年記が記されておらず、およその時期しか判明しない点が惜しまれるが、少なくとも絵巻「泣不動縁起」は中世の清浄華院とはほとんど無縁の存在であつたらしいことが判明する。実際、江戸初期までの宝物目録にも絵巻の存在は記載されていない。また、二本とも寄進の契機が伝「泣不動」像の存在であり、近世までの清浄華院におけるもつとも著名な宝物が絵巻ではなく、この絵像であつたことが判明する。

(15)

中井真孝「中世の浄華院について」〔浄華院の創建・補考〕（『法然伝と浄土宗史の研究』思文閣 一九九四）所収  
 ちなみに『真如堂縁起』（小松茂美編『清水寺縁起 真如堂縁起（続々日本絵巻大成 伝記・縁起篇五）』では、向阿証賢が『三部仮名抄』の始まりとなる『帰命本願抄』の執筆に際して、真如堂に参籠し如来の化身と思われる二人の僧が討論するさまを見て、自らの信仰に確信を抱くという場面が描かれている。これは『帰命本願抄』の冒頭に記された執筆動機をもとに描かれた場面と考えられる。向阿証賢は個人的に真如堂に対する強い信仰を抱いていたらしく、清浄華院に伝わる彼が所持した「阿弥陀経」の奥書には、自らの死後、これを真如堂に納めてほしいと記している。『真如堂縁起』に彼やその著作に関する靈験が描かれていることから推測すると、鎮西派という枠を超えて、真如堂を中心とする京の念仏信仰者の間で、向阿が一定の評価を確立していたと考えられるのではなからうか。

(16)

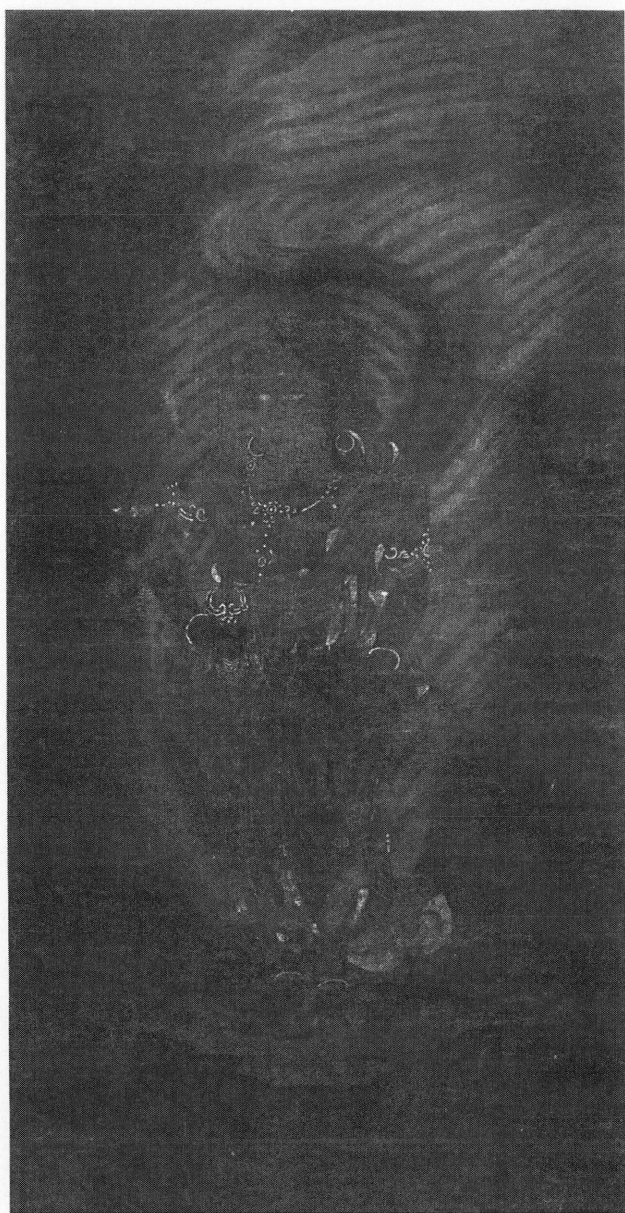
「古文書十六卷」に関しては宇高良哲「浄土宗京都浄華院成立年次考」（『大正大学研究紀要』七一輯）による。  
 (17) 清浄華院文書では西谷庄は貞和四（一二三八）年に恒明によって寄進され、延文二（一二三七）年に全仁によって再安堵されている。この二通の文書は現在、一紙に書写された状態となっている。寄進先となった称佛明院は史料上判

明する清浄華院最古の末寺であるが、詳細は判明しない。

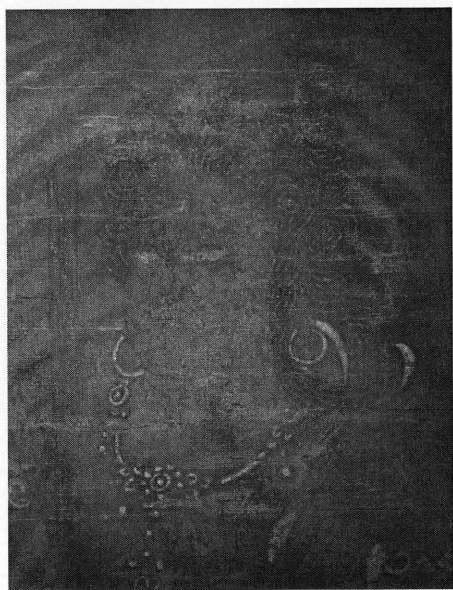
(18)

村井章介「皇統の対立と幕府の対応―『恒明親王立坊事書案徳治二年』をめぐって―」(『鎌倉時代の朝幕関係』思文閣 一九九二)『分裂する王権と社会〈日本の中世〉』(中央公論社 二〇〇三)『南朝全史』(講談社 二〇〇五)

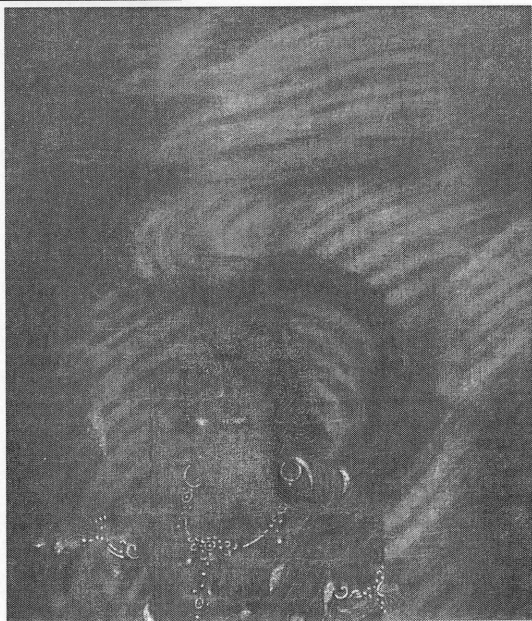
本稿執筆ならびに図版の使用にあたっては大本山清浄華院ならびに沢野直弥氏(日進市岩崎城記念館副館長)・山西泰生氏(佛教大学研究員)・松田健志(京都民族学会会員)より様々なご厚意を賜りました。末尾にて恐縮ながらお礼申し上げます。



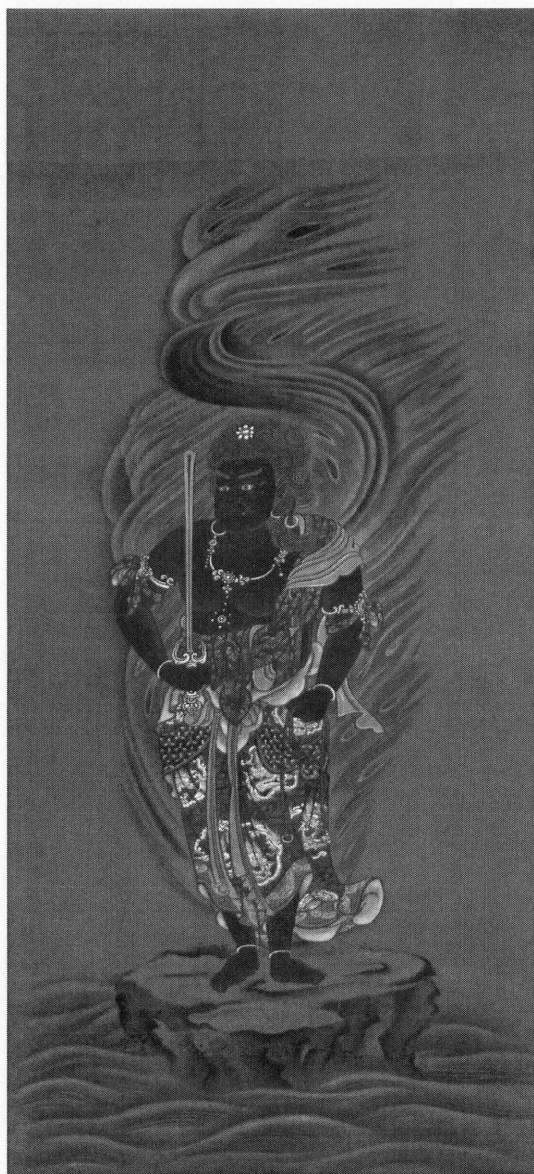
【図1】 伝「泣不動」像



【図2】 伝「泣不動」面部



【図3】 伝「泣不動」光背部



【参考】 泣不動尊写